

Title	Josef Bayer, Der Mensch im Eiszeitalter I. II. Leipzig u. Wien 1927
Sub Title	
Author	大山, 柏(Oyama, Kashiwa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.2 (1928. 7) ,p.154(308)- 155(309)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。(三、三、一、夜、武田勝藏)

中世職人史

(ピエール・ブリゾン原著
白井勝喜代譯 刀江書院發行)

從來の歐洲經濟史に關する邦人の文献は、多くは一般的な概説であつて、微に入り細に亘つて論述したものが極めて少ないやうである。故に今後邦人の歐洲經濟史研究は一步を進めて、根本的な個々の史實の探究に向ふべきであつて、斯くて邦人の歐洲經濟史研究は一層高い價値を有することとなるであらふ。茲に於てか最近 Pierre Brizon; *Histoire du Travail et des Travailleurs* の前半が「中世職人史」と銘打つて譯出されたことは洵に意義深いことである。

本書は中世より佛蘭西革命に及ぶ手工業時代に於ける工業労働者及び農民の生活について詳細に論述したものであつて、極めて興味ある豊富な材料を紹介しつゝ、それが綜合に妙を得たるものである。先づ初めに同業組合につきて述べ、近世に於けるブルジョアツの元祖が中世の同業組合なることを説き、又大工業の起原に就いては、近世の大工業は佛蘭西革命以後を主とするも、實は大工業の起原は革命以前に存せることを明らかにし、更に同盟罷工は近世的産物に非ず、既に中世に於て近世のそれと類似せる同盟罷工の行はれしことを述べ、幾多往時の實例を擧げてゐる。又「泣く土地」と題して中世農民の哀れむべき生活状態を述べ、「生れる土地」と題しては農民が漸次中世の拘束から脱して生活の光明を見出すに至りし状態を述べてゐる。此の外處々に於いて勞働

法制に論じ及ぼしてゐることも見逃し難いところである。然し要するに本書の特色は、中世の凡ゆる種類の工業労働者の生活を詳細に寫し、其の状態を讀者の眼前に髣髴せしめる點にある。而して挿入された多くの圖版は一層此の書の價値を多からしむるものである。

譯者白井氏は法制史研究のため外遊され最近歸朝した人であつて、譯文の流暢にして平易明快なる、巧みに俗語俚言を使驅し、つとめて中世的雰圍氣を再現せしむるに苦心せるは敬服すべきである。敢て萬人に薦むるに躊躇しない。(有賀春夫)

Josef Bayer, *Der Mensch im Eiszeitalter*

I. II. Leipzig u. Wien 1927.

豫てから、バイヤー氏の近著が出版せらるゝことを聞いて居つたが、此程漸く入手することが出来た。氏はウキーンに於ける自然史博物館に於ける史前學人類學部長で、燬國に於ける舊石器時代研究の權威である。それが豫てよりの研究を取纏められたもので、財政逼迫の燬國として、出版も遅れ、第一第二編のみを一冊として、今回出版せられたのも、こんな所に理由があるのではないかと、想像をして居る。

本書は其名の如く「氷河時代の人類」の研究であり、これを史前學上から云へば、舊石器時代の研究なのである。其第一編は *Der Weg zur Relativen Chronologie des Eiszeitalters*、即ち「氷河時代の相對編年への道程」であつて、これを四章に分ち、この時代

代の編年を研究し、特に力を洪積層の研究に注いで居る。第二編は *Entwurf einer historische Geologie des Eiszeitalters* 「氷河時代に對する地史學上の一輪廓」と題し第五章以下第八章までの四章に區分し、緒言より、古期洪積時代即ち古期氷河時代、中期洪積時代即ち氷間期、新期洪積時代即ち新期洪積氷河時代の各章に夫々内容を區分して研究して居る。而して特に巻頭の第一第二編緒言に於て、第三編に於て、化石人類と其文化を研究する事を豫告してある。それ故この第一第二編は前論とも云ふべきで、當時の人類や文化などには直接觸れて居らない。殆んど全部が廣義の地史學的研究であり、内容は地質學上の層位學、氷河學や洪積動植物學であつて、漸く引合ひに化石人類や其文化が出てくるのみで、氣早に本書を見ると、之が史前學の書かと疑はれもしよう。

然しこれには大なる理由がある。元來バイヤー氏は、氷河時代に對し、ドイツのヘンク其他のアルプス四氷河説に對し、根本から反對で、三氷河説の持主であり、多年これに關する論争を續けて居る人である以上、洪積人類を説く以前に、先づ以て基礎をなす氷期編年を自説の如く確立しなければならぬ。其研究が本書なのである。それ故、殆んど單なる洪積時代研究書と思はるゝ程、これに力を入れて居るのも、氏自身に取つては尤のことである。この三氷河説に對する根柢に於て、立脚點は認めらるゝがさりとて今日無條件でこれを容れることは出来ない。アルプス氷河が奥國方面では三回、獨佛伊方面では四回の進退があつたが、全般に三回づゝか、四回づゝか、尙々研究の餘地が充分にある。

この全般統一した研究が完成しない以上は、局地研究のみからの立論(バイヤー氏は必ずしも局地研究のみではないが)は、保留せらる可く安全である。然し本研究により、特に小局地の多數例に於て得る所多く、特に動物群、植物群の研究では、從來比較的閑却せられて居つた方面にも、相應に研究せられて居る點に於て、一特色を發揮して居る。それ故本書は初めて、歐洲舊石器時代を研究せんとする方々には、御勧めしないが、既に研究緒についた方々には良參考書である。特に本書の如く自然科學に基礎を發して、進む可きが、今日の研究であることを附言して置く。

(昭和三、六、一三、大山柏)

Fritz Wieger, *Diluviale Vorgeschichte des Menschen*. 1928.

バイヤーの書評を試みた數日後にこの新刊に接した故、これもついでに紹介することとする。

著者は伯林地質調査所の教授、ドイツに於ける舊石器時代研究家として、錚々たる一人で、從來からの研究は相應にある。

特に著者の近著として有名なのは *Diluvialprähistorie als geologische Wissenschaft*. 1920 即ち「地質學としての洪積史前學」の表題のもとに、舊石器時代研究の根柢を地質學上に置き、特に層位學的研究と共存生物とよりして、舊石編年に及ぼしたもので、より顯著に自然科學を基礎とした點に於て、この著の價值を認められて居る。然るに今回、表題の如く『洪積史前の人類』を出版